



—東地中海地域ニュース—

中東和平：イスラエル軍とレバノン軍の交戦
(3日付レバノン国内関連報道及び4日付イスラエル各紙)

3日、イスラエル・レバノン国境付近において軍事衝突が発生した。本件について、同日付レバノン国内関連報道及び4日付イスラエル各紙は、以下のように報じた。

1. 3日付レバノン国内関連報道（15時時点）

(1) 3日正午過ぎ、南レバノン県マルジャイユーン郡アディーサ村（UNIFIL 司令部があるナクーラの北東約48km）において、テクニカル・フェンス越しにイスラエル側からレバノンに向け、戦車による砲弾及び迫撃砲の発射を含む交戦が行われた。

(2) イスラエル軍は、アディーサ村との国境沿いに監視カメラの設置を試み、レバノン領域内の木々を伐採しようとしたため、レバノン国軍がこれを阻止しようとしたところ、極めて緊張した事態に陥った。その直後に UNIFIL が介入したが、事態は両者の交戦へと発展し、イスラエル軍戦車1両から少なくとも2発の砲弾がアディーサ村に向けて発射された。アディーサ上空では、イスラエル軍ヘリコプター多数が旋回している。

(3) 治安筋によればイスラエル軍戦車による砲弾の発射は、アディーサ村にある国軍基地を標的としたものであり、アディーサ村とクファルキラ（アディーサ村北約2kmに位置）を結ぶ道路においてイスラエル軍兵士からの狙撃が行われたため、レバノン国軍は、発砲がなされた地点に向けて応射した。治安筋によれば、交戦の結果、レバノン国軍兵士3名が死亡、4名が負傷、イスラエル軍将校1名が死亡した。また、ヒズボラ系アルマナール TV 等は、レバノン発行アフバル紙のレバノン人記者1名が死亡したと報じた。

2. 4日付イスラエル紙報道

(1) 4日午前の現場の状況

a. 同日朝、昨日奇襲攻撃を受けたのと同じイスラエル軍部隊は、現場において、当初の目的である眺望を妨げていた木の伐採を終了する作業を行った。レバノンの報道によると伐採は終了した。

b. 軍事筋によるとイスラエル軍は、昨夜の内に UNIFIL に対して通常任務を行うことを伝達

していた。

(2) 今回の軍事衝突に関するイスラエル側の見方

- a. 4日、UNIFILは、イスラエル兵がレバノンとの国境を越えていなかったと述べた。また、レバノン情報筋は、レバノン軍が先に発砲したと述べた。
- b. イスラエル軍の報告によれば、同軍は3日午前6時頃 UNIFIL に対し、3時間後にレバノン国境付近で眺望を妨げる障害物を除去する作業を始めると報告した。UNIFIL は同軍に対し、準備のために同作業を数時間延期するよう要請し、同軍はその要請に応じて午前11時に作業開始時間を延期した。UNIFIL は、それをレバノン軍に伝達したが、同軍はその延期時間を利用して、イスラエル軍への奇襲攻撃の準備を進め、同攻撃を報じるために現場に報道陣を招集した。高官筋は、レバノンの報道陣が現場に召集されていながら、イスラエル軍に対して奇襲攻撃に向けた準備に関する情報が伝達されなかった背景を調査すべきであると述べた。
- c. 今後イスラエルは、米及び仏国によるレバノンへの軍事支援をやめるよう政治的に働きかける予定。また、イスラエル及びレバノン双方に自制を求めた国連安保理の声明を受けて、イスラエル政府高官は、安保理が今回の事案に関するレバノンの責任を追及しなかったことを理由に不快感を示した。

(3) 解説

- a. 今回の軍事衝突は、過去数年で最も深刻な事件である。同事件は、ブルーラインとセキュリティフェンスの間に位置するエンクレイブ区域で、国際法上はイスラエル側に位置する。2006年に発生した第二次レバノン戦争終了後、イスラエル軍は同区域への方針を変更し、同区域にイスラエルの主権を行使すべくプレゼンスを強調してきた。こうした場合、厳密な国境の位置の解釈が両国で異なるため、国境を挟んだどちらにイスラエル軍が位置しているかをめぐる議論が生じる。
- b. 過去数ヵ月、レバノンとの国境全体において、レバノン軍、特にシーア派イスラム教徒が指揮官を務める第9旅団がイスラエルの挑発行為に対する攻撃的な対応をとっていたため、レバノン軍とイスラエル軍との摩擦が高まっていた。ただし、レバノン政府に対しイスラエル紛争の意図がないことに鑑みれば、事態が拡大することは考えにくい。問題は、第三者であるヒズボラがハリーリー元首相暗殺事件に関して近く同幹部に逮捕状が出される状況を受け、火に油を注ぐ決定を行えば、事態が悪化する恐れがあることだ。